

参与構造の類型について：  
日常会話コーパスを用いた  
ボトムアップのアプローチ

遠藤智子  
成蹊大学  
シンポジウム『日常会話コーパス』Ⅳ  
2019.3.4 国立国語研究所

『創発参与』プロジェクト

- 「会話における創発的参与構造の解明と類型化」
- 領域指定型共同研究（公募）
- 「マルチモーダル会話分析」
- 2016年10月～2019年9月（3年間）
- 遠藤（成蹊大）・大野（アルバータ大）・片岡（愛知大）・黒嶋（玉川大）・坂井田（NII）・杉浦（摂南大）・鈴木亮（慶応大）・高梨（京大）・中山（東外大）・名塩（広島大）・秦（阪大）・増田（京産大）・安井（名古屋大）・横森（九州大）

1

日常会話コーパス

- 誰が、誰と、何をしているところなのか分かるデータ
- 「話すために話す」ことをしているのではない
- 言語のnatural habitat (Schegloff 1996)での使用
- 実際の活動の中で、言葉や体、道具を使いながら人が何をしているのかを観察することができる



発話は誰にあてられている？  
その発話で話者は何をしようとしている？  
その発話の受け手は誰で、次にどう行動する？

<https://pj.ninjal.ac.jp/conversation/corpus.html>

※2017年3月の公開研究会時提示資料より

このプロジェクトで明らかにしたいこと

会話における創発的参与構造の

– 解明

参与構造が多様で複雑なことは既にわかっている。

どのようなプロセスで参与構造が形成・変化するのか？

– 類型化

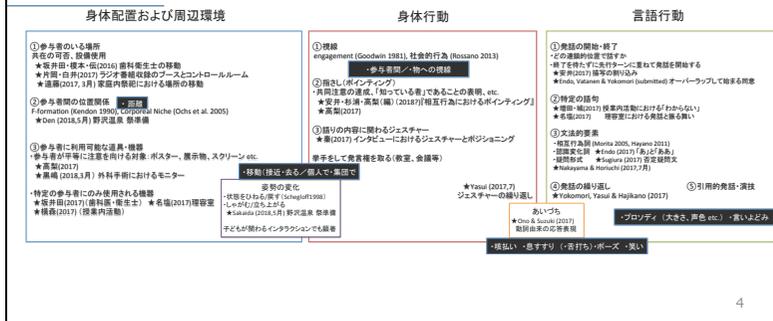
参与構造を理解・記述するためには

どのようなパラメータが必要か？

どのようなモデルを立てればよいか？

3

## 2018年3月のシンポジウムにて： 参与構造に関わる要因



## 本発表の構成

1. 参与構造とは？
  - どういう概念か
  - なぜそれが言語学にとって重要なのか
    - Levinson(1988)
2. ボトムアップのアプローチでわかること
  - 例(1)「話し手」・引用・スタンス表明
  - 例(2)「聞き手」・順番取り・身体行動
3. 文法研究との関わり・今後の展望

## 1. 参与構造 (participation framework)とは？

- 「ふつうの」伝達モデル
  - Speaker/Addressee (/Audience)



## 「話し手」「聞き手」を分解する

Goffman, Erving (1922-1982)

- 社会学者
- “footing”
- “face-work”
- “frame analysis”
- ドラマツルギー
- アイデンティティ



- ゴフマンは言語学ではあまり顧みられていない (Levinson 1988)
- Cf. 『触発するゴフマン』 (2015、新曜社) 第10章、滝浦真人「ゴフマンと言語研究—ポライトネスをめぐる—」

## Footing (Goffman 1974, 1981)

### 「話し手」産出フォーマット どのような者として話すか

- 発声者 (animator)
- 著者 (author)
- 責任主体 (principal)

Animatorではあるがauthorでない例：

- スピーチライターが書いた原稿を読む
- センター試験で注意を読み上げる

★プロソディや身体行動が深く関わる

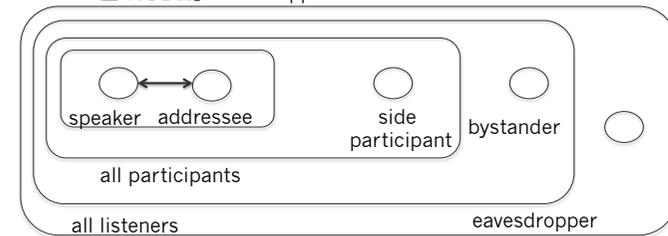


<https://abcnews.go.com/Politics/richard-nixon-deceitful-politicians/story?id=24853846>

8

### 「聞き手」参与役割：どのような者として関わるか

- 「承認参与者」 ratified participant
  - 「受け手」 addressee
  - 「傍参与者」 side participant
- 「未承認参与者」 unratified participant
  - 「立ち聞き者」 overhearer,
  - 「傍観者」 bystander
  - 「盗み聞き者」 eavesdropper



Clark (1996:14)

## 注：用語について

- Goffman (1981)では、話し手の諸役割 = 「産出フォーマット」、聞き手の諸役割 = 「参与枠組み」として呼び分けている
- ただし、Levinson (1988)が指摘するように、話し手と聞き手の各役割の両方を指すこともある
- 本発表では全体を指して「参与構造」と呼び、各役割を「参与役割」と呼ぶ
- 高梨克也 (2016) 『基礎からわかる会話コミュニケーションの分析法』 (ナカニシヤ) 第5章「多人数会話と参与構造」第6章「成員カテゴリー」第7章「関与配分」
- 片岡邦好・池田佳子・秦かおり (編) (2017) 『コミュニケーションを枠付けする』 ひつじ書房 第一章「参与・関与の不均衡を考える」
- 村田和代編(2018)『聞き手行動のコミュニケーション学』山口征孝「聞き手の参与枠組み再考：聞き手役割のモデル化の有用性」

10

Levinson, Stefan C. 1988  
**Putting Linguistics on a Proper Footing:**  
 Explorations in Goffman's Concepts of Participation  
 In P. Drew & A. Wootton (Eds.),  
*Erving Goffman: Exploring the interaction order*

- ゴフマンのモデルの問題点
  - 役割の区別が不十分
  - 特徴付が明確でない
  - utterance-event と speech-eventの区別が必要
- 参与役割の整理／文法的実現／相互行為上の動機づけ

11

### Levinson (1988)の提案 (1) 基本カテゴリーと派生カテゴリー

- 基本カテゴリー
  - source = メッセージの情動的・発話行為的 源
  - target = メッセージの " あて先
  - speaker = 発話者
  - addressee = 近接したあて先
  - participant = 他の参与者に対し、承認されたchannel-linkを持つもの
- 派生カテゴリー (次スライド) はこの組み合わせでできる

12

### Levinson (1988)の提案(1') 基本カテゴリーと派生カテゴリー

- 派生カテゴリー
  - producers = sources または speakers
  - recipients = addressees または targets
  - author = source かつ speaker
  - relayer = sourceではないspeaker
  - goal = targetであるaddressee
  - intermediary = targetではないaddressee

13

### Levinson (1988)の提案(2) 産出役割 producer role (simple ver.)

- 弁別の特徴 :
  - [MESSAGE ORIGIN] メッセージの源か否か
  - [TRANSMISSION] 実際に**発話・伝達**しているか否か
- author            [+ ORIGIN] [+ TRANSMISSION]
- indirect source   [+ ORIGIN] [- TRANSMISSION]
- relayer            [- ORIGIN] [+ TRANSMISSION]
- Super-ordinate ('natural') classes:
  - speaker = + [TRANSMISSION]
  - source = + [ORIGIN]

14

### Levinson (1988)の提案(3) 産出役割 producer role (complex ver.)

- ORIGIN (源) をさらに分ける
  - [MOTIVE] メッセージを伝えようという動機
  - [FORM] メッセージの形式
- [PARTICIPANT]
- [TRANSMISSION]

15

Producer role (Levinson 1988:173)					
Term	PARTIC	TRANS	MOTIVE	FORM	Examples
(a) Participant producer roles					
author	+	+	+	+	普通の話し手
'ghostee'	+	+	+	-	Ghosted speaker
spokesman	+	+	-	+	法廷弁護士
relayer	+	+	-	-	声明読み上げ人
deviser	+	-	+	+	声明の作者
sponsor	+	-	+	-	法廷の被告
'ghostor'	+	-	-	+	その場にいるゴーストライター
(b) Non-participant producer roles					
ultimate source					軍事命令の源
principal	-	-	+	-	議員の有権者
formulator	-	-	-	+	ゴーストライター <sup>16</sup>

### Levinson (1988)の提案(4) 受け手の役割 (reception roles)

- [ADDRESS] メッセージが宛てられているか
  - 二人称の形式、呼格 (的呼びかけ)、ジェスチャー、視線 etc.
- [RECIPIENT] 誰のためのメッセージか 言語形式等
- [PARTICIPANT] 承認された参加者か
- [CHANNEL-LINK] メッセージを受け取ることができるか

17

Reception roles (Levinson 1988: 174)					
	ADDRESS	RECIPIENT	PARTICIPANT	CHANNEL-LINK	Examples
(a) Participant reception roles					
interlocutor	+	+	+	+	普通の聞き手
indirect target	-	+	+	+	
intermediary	+	-	+	+	委員会の議長
audience	-	-	+	+	
(b) Non-participant reception roles					
overhearer	-	-	-	+	傍観者
targetted overhearer	-	+	-	+	
ultimate destination	-	+	-	-	

18

### Karen's role

(Sacks, Schegloff and Jefferson 1978:29;  
cited in Levinson (1988: 166, 210))

01 Sharon: You didn't come to talk to **Karen**?

02 Mark: No, **Karen** – **Karen** and I are having a fight

03 (0.4)

04 After **she** went out with Keith an' not with (me)

05 Ruthie: Hah hah hah hah

06 **Karen**: Wul, Mark, you never asked **me** out.

- GoffmanのモデルではRuthieとKarenの役割がどちらも傍参加者(side-participant)で区別できない
- LevinsonのモデルではSharonはaddressee、Karenは indirect target、Ruthieはaudience
- 山口(2018)にも説明あり



19

### Useful superordinate categories (unspecified for other features)

- Production
  - speaker = + [TRANSMISSION] (ゴフマンのanimator)
  - composer = + [FORM] (ゴフマンのauthor)
  - motivator = + [MOTIVE] (ゴフマンのprincipal)
  - source = ( + [MOTIVE], + [FORM])
- Reception
  - recipient = + [RECIPIENT]
  - addressee = + [ADDRESS]
  - participant = + [PARTIC]
  - hearers = + [CHANNEL-LINK]

20

### Levinson (1988) 参与役割の文法的実現

- “But it is very much an empirical question as to how, and to what extent, **the set of participant roles are grammaticalized in specific languages**. Thus I shall try to argue that **participant roles more specialized than simple speaker (first person) and addressee (second person) are sometimes encoded in the structure of languages, [...]**”
- “[...] there may be much to be learnt from grammatical distinctions about the kinds of participant role we need to distinguish between.” (p.182, emphases added)
- 参与役割の区別は文法的区別にも現れる

21

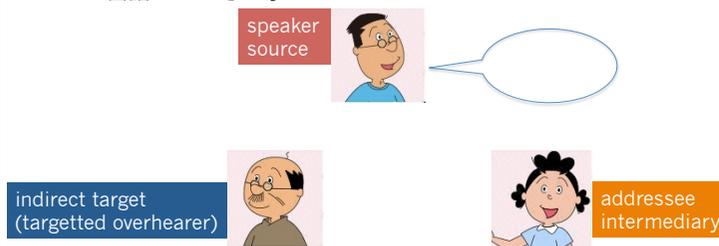
### Levinson (1988) 参与役割の文法的実現

- 人称代名詞のシステム (1<sup>st</sup>/2<sup>nd</sup>/3<sup>rd</sup>)
- 証拠性 (evidentials) の標識
- 「宛てられてなさ」の標識
- 文のタイプ (ムード)
  - imprecatives, exclamations, optatives, hortative (desiratives)
  - Third-person imperatives
- 直示
  - 空間的直示、社会的直示

22

### Levinson (1988) 参与役割の相互行為的動機づけ

- Ethnography of speakingへの応用
  - 義理の父親には直接話しかけない習慣を持つオーストラリアの言語について 等



画像はサザエさん公式サイトより

### Levinson (1988) 参与役割の相互行為的動機づけ

- 産出側 (source)の問題
  - インタビューで既に語られたことをまとめる
  - 皮肉
- 受け手側の問題
  - out-louds
  - indirect targets

※ラジオやTV番組の例であり、詳細な分析でもない

24

### Antaki et al. (1996)

- 会話の引取り(co-completion)
  - 01 A: ..... [..
  - 02 B:        [.....
  - 03 A: .....
- どのような立場から引取りをするのか
  - author / relayer / spokesperson
- 引き取り発話をする話者の役割により、その後の展開(03行目)が違ふ

25

### Levinson (1988): まずは種類の整理を目指した

In considering the ethnographic remarks, though, a basic limitation of the present enterprise should be borne in mind: **we are not here primarily concerned with the processes through which particular participant roles are assigned or claimed**, except in the most sketchy way. Rather, **we are concerned with what kinds of categories we need to capture the assignment that we intuitively perform**. There is little doubt that what is really interesting is precisely how such categories are invoked and manipulated, and what background expectations and linguistic and conversational devices play a role in these assignments. But to study *that*, we need to have in advance some provisional idea of what kinds of categories we may encounter — although **in the final analysis any such system of categories should include just those that emerge from the careful analysis of interactional data**. (Levinson 1988:192, italics in original, bold face added)

26

### Levinson (1988)への批判

- Irvine (1996)
  - 他にもまだ検討されていないタイプの役割があり、役割の数が無限に増える
  - 話し手がある参加者をTargetにしているかどうかの理解には発話状況のvisualな情報が必要
- Goodwin & Goodwin (2004)
  - 話し手と聞き手の間に交渉や相互モニタリングがない
  - 静的なカテゴリーを立てるのみで、どのようなリソースが用いられて参与が動的に達成されるかについて論じていない
  - (話し手と聞き手に非対称性がある-聞き手側の役割に関する考察が不足
  - 身体行動よりも言語行動が重視されている

27

## 2. ボトムアップに参与構造を考える

- 参与者が担う役割は、制度的にある程度決まっているかもしれないが、その場のやり取りの中で交渉されるものである
- 相互行為におけるどのような行為が参与構造を示し、また変化させるか：参与構造が変化するプロセスはどのようなものか
  - 発話
  - プロソディ
  - 非言語行動
- 参与構造を変化させながら参与者は何をしているのか
  - (1) [足やってもいいよ] ... 産出役割について
  - (2) [接客と満足度] ... 傍参与者の順番取り・関与について

28

## 例(1)CEJC K002\_003a [足やってもいいよ]

- 杉田の店舗に中沢が来てフットマッサージを行いながら雑談（中沢がマッサージの練習中）
- 中沢はアロママッサージもできる
- 中沢がマッサージを習ったのは、家族にマッサージをしてあげたいから



## (1)CEJC K002\_003a [足やってもいいよ]

- 01 中沢：なんかアロマのときは：  
 02 杉田：ええ  
 03 (.)  
 04 中沢：あんまり自分からやってほしいとかゆわなかったんですけど。  
 05 杉田：[うん  
 06 中沢：これは(.)結構(.)h やってもいいよ!!とか言って。 ah haha  
 07 [hh  
 08 杉田：[あやってよ!!じゃなく[て? (.) やってもいいよ!!みたいな?  
 09 中沢： [そう。 やってよや .h huh huh そうなんですよ。  
 10 (0.3)  
 11 杉田：へ[-:.....  
 12 中沢： [hh 足やってもいいよ!!!とか言って。  
 13 (0.3)  
 14 杉田：へ-[::  
 15 中沢： [言ってくれるから ((この後、杉田による質問で話題転換))

30

## 声の導入、参与構造、スタンス表明

- ひとつの発話の内部にも複数の役割
- 引用表現（加藤 2010）
- Voice (Hill 1995)
- プロソディ上の特徴：延伸
  - 「やってもいいよ!!」実際の発話を模した産出
  - 中沢 = relayer [+PARTIC], [+TRANS], [-MOTIVE], [-FORM]
- 形式を取り立てる
  - 「やってよ!!」 vs. 「やってもいいよ!!」
  - その場にはない中沢夫 = ultimate source, [+MOTIVE][+FORM]
- 評価的スタンスの表明
  - 「やってもいいよ!!!」 <許可をあたえる中沢夫>
  - ←「言ってくれる」 <恩恵を受ける中沢>
  - 演技的な産出、笑い

31

### 例(2) 「接客と満足度」

- 大学4年生の卒論指導
- 3人まとめて個人面談
- アスミの卒論:  
「接客と幸福度」について
- アスミが「幸福度」で検索したものの  
知りたいような内容の研究が見つからないと言うので、  
教員の近藤は「満足度」が適切な用語ではないのかと指摘
- セイコとユイは傍参与者 - アスミと近藤の話を聞くが、中心的な  
参与者ではない（ただし、ここで行われている活動は何か？）



32

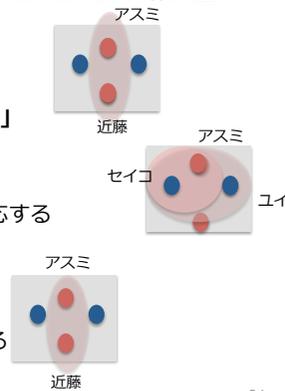
### (2)[接客と満足度] (後半)

52アスミ: [い-接客と満足度[って出して::, >まあ<[いい接客だったらそりゃ満足するよねって:: .hhh  
53近藤: [ん::: [ん::: [heh heh heh  
54セイコ: [確か[に  
55近藤: [確かにね::  
56 (1.0)  
57近藤: [( )  
58セイコ: [数字でやれば.<七段階>とかで. uhuhu[huhu  
59アスミ: [あ:::  
60セイコ: [でもわ\$か\$んないよね\$. .hh \$今のどれくらひい\$だ\$った\$ [hahahaha[ha  
61ユイ: [A HA HA [HA HA HA  
62アスミ: [hhhhh  
63セイコ: [よんかな:::っていう  
64?: ( )  
65 (0.5)  
66アスミ: .hhhらん. (.)そう:::ですよね.  
67 (1.0)  
68ユイ: 満足度. 幸福度.  
69近藤: あとどう測るのかっていうのと:::例えばディズニーランドとか::

33

### 傍参与者から話し手へ、そして元の構造へ

- 基本: アスミと近藤の面談
- 傍参与者(audience)からの提案
  - セイコ「数字でやれば. 7段階とかで。」
  - 面談対象学生(アスミ)へ視線
  - 常体
  - 他の参与者はセイコを見、笑いで反応する
- 元の構造へ戻る
  - アスミ「そう:::ですよね」
  - 顔の向きが正面(近藤=教員)に戻る
  - 敬体



34

### (2)' [接客と満足度]前半

31アスミ: 探しても.(.)なんでもあ幸福度をどうやって定義するか?  
32 (.)  
33セイコ: あ::: [↑幸福度って言葉が:::そういう方面で使われるように  
34近藤: [定着しちゃってってるから:::  
35アスミ: [はい.  
36近藤: <満足度>とかだったらいっばい(.)接客の方面[ (でもあるんじゃないの)  
37アスミ: [あ::満足度.  
38近藤: うん. 幸福ってなんかもうちょっとなんかこう長いスパンの(.)[話(.)じゃない?多分  
39アスミ: [そうですね  
40近藤: 言葉のイメージとして:::[<>もちろん<>あの(.)  
41セイコ: [たしかに.(うなずく))  
42近藤: ねえいい接客してもらったらハッピーになるけど::  
42?: [らん ((セイコ、ユイらなづく))  
43近藤: [それって幸福度って呼ぶよりも::満足じゃ::みたいな  
44セイコ: [あ::たしかに  
45近藤: [満足度って[言葉にしたほうが  
46アスミ: [短い(.)スパンってことですか  
47近藤: うん  
48 (2.0)  
49アスミ: だから. でも.<満足度> [(.)なんか<安易>かかって思っちゃう  
50近藤: [うん' .hhh huh huh



35

## (2)' 「接客と満足度」 (前半) 傍参与者の関与

### 身体行動

- アスミ：教員の発言を受けてノートを取る
  - セイコ：頬杖をつき、どこを見るでもないが  
しかめ面をしたりする
  - ユイ： スマホをいじっている
- 
- セイコ アスミ ユイ
- 近藤：「いい接客をしてもらったらハッピーになる」
  - セイコ・ユイ：うなづく
  - セイコ：「あー……」「あー：たしかに」-アスミに宛てられた発話に対して理解を示す →その後「数字でやれば？」発言
  - 関わり方が身体行動や反応表現で示されている (参与のスタンス表明)

36

## 3. 文法研究との関わり

- Hopper (1987, 1998) Emergent Grammar
  - 文法は使用の中で生まれ、変わり続ける
- Hopper (2015: 314) “[...] the emergence of linguistic structure will be treated [...] as a process of continual creation during actual usage.”
- “The close analysis of an extended turn at talk compels us to consider provisional and emergent form as possible **without movement toward sedimentation beyond the local context.**” (Ford and Fox 2015 “Ephemeral Grammar: At the end of emergence”: p.95, emphasis added)

37

## 言語行動と非言語行動

- Levinson (1988): 参与役割の文法上での実現
- 文法にコードされること- “Grammaticizable notions”  
(cf. Slobin 1997, Talmy 2001)
  - grammar ↔ lexicon
  - verbal ↔ nonverbal
- 非言語行動によって行うこと & 言語行動で行うこと
  - 相互行為のマルチモーダル分析 (Goodwin 2018; Mondada 2014; Keevallik 2014, *inter alia*)
  - “Verbal resources are mostly symbolic, whereas bodily ones often iconic and indexical and thus complementary.” (Keevallik 2018: 17)

38

## 非言語行動に支えられた言語使用

- 非言語行動で行った方が効率の良いことは何か？
- 指標性 (indexicality)の高いもの
  - 指差し
  - 視線
  - 体の向き
- 感情を込められるもの
  - プロソディ
- 言語行動で行った方が効率の良いことは何か？
  - 「今、ここ」を離れた命題内容

39

## もう少し考えないといけないこと

- Membership (成員性)
  - 高梨編(2018)『多職種チームで展示を作る』、片岡・池田・秦(編)(2017)所収の諸論文
  - 他の種類の成員(家族、教師-生徒、店員 etc.)
  - 成員である／になるためのふるまいとして行動を見る？
- Interactional histories (相互行為の履歴)
  - 指導の積み重ねと言語形式の変化 (Deppermann 2018; Pekarek Doehler et al. (eds.))
  - 相互行為の履歴はどのようにその場の行動に現れるか？

40

## まとめ(1)

- 参与構造の種類とについて: Levinson(1988)の概観
- 日常会話コーパスその他のデータから
  - 参与構造を利用した評価的スタンスの表明
  - 身体行動や反応表現による聞き手の関与表明
- マルチモーダル会話分析: 言語行動と非言語行動の詳細な理解
  - 文法研究の新たな方向性-「その場限りの文法」?

41

## まとめ(2): 今後の予定

- 本日午後: ポスター発表いろいろ
- 来週(3/11): 国際シンポジウム“Embodied Interaction and Linguistics”(ことば・認知・インタラクション7)
  - Leelo Keevallik, 細馬宏道, 秦かおり, 名塩征史
- 2019年6月: 国際語用論学会@香港にて参与構造についてのパネル
- 2019年度前半のどこか(予定): 安井・杉浦・高梨編『相互行為における指さし』ひつじ書房
- 2019年9月(予定): 「創発的参与構造」プロジェクト終わりのシンポジウム

42

## 参考文献

- Deppermann, Arnulf (2018) Changes in turn-design over interactional histories – the case of instructions in driving school lessons. In Deppermann, Arnulf & Jürgen Streeck (eds.) *Time in Embodied Interaction: Synchronicity and Sequentiality of Multimodal Resources*. John Benjamins. pp.293-324.
- Ford, Cecilia E. & Barbara A. Fox (2015) Ephemeral Grammar: At the far end of emergence. In Deppermann, Arnulf & Susanne Günthner (eds.) *Temporality in Interaction*. John Benjamins. pp.95-119.
- Goffman, Erving (1974) *Frame Analysis*. Boston: Northeastern University Press.
- Goffman, Erving (1981) *Forms of Talk*. Oxford, England: Basil Blackwell.
- Goodwin, Charles (2018) *Co-Operative Action*. Cambridge UP.
- Goodwin, Charles & Marjorie Harness Goodwin (2004) Participation. In Duranti, Alessandro (ed.) *A Companion to Linguistic Anthropology*. pp. 222-244. Oxford: Wiley-Blackwell.

43

- Hill, Jane H. (1995) The Voices of Don Gabriel: Responsibility and Self in a Modern Mexican Narrative. In Tedlock, Dennis & Bruce Mannheim (eds.) *The Dialogic Emergence of Culture*. Chicago: University of Illinois Press. pp. 97-147.
- Hopper, Paul J. (1987) Emergent Grammar. *BLS* 13: 139-157.
- Hopper, Paul J. (1998) Emergent Grammar. In M. Tomasello (ed.), *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, vol.1. pp.155-176. Lawrence Erlbaum.
- Hopper, Paul J. (2015) An Emergentist Approach to Grammar. In MacWhinney, Brian & William O'Grady (eds.) *The Handbook of Language Emergence*. pp.314-327. Wiley Blackwell.
- Irvine, Judith (1996) Shadow conversations: The indeterminacy of participant roles. In Silverstein, Michael & Greg Urban (eds.), *Natural Histories of Discourse*. pp. 131-159. Chicago: University of Chicago Press
- 片岡邦好・池田佳子・秦かおり(2017)「参与・関与の不均衡を考える」. 片岡・池田・秦(編)『コミュニケーションを枠付ける』ひつじ書房. pp.1-23.
- 加藤陽子 (2018) 『話し言葉における引用表現』くろしお出版.
- Keevallik, Leelo (2018) What does embodied interaction tell us about grammar? *Research on Language and Social Interaction* 51(1): 1-21.
- Levinson, Stephen C. (1988). Putting Linguistics on a Proper Footing: Explorations in Goffman's Concepts of Participation. In P. Drew & A. Wootton (Eds.), *Erving Goffman: Exploring the interaction order* (pp. 161-227). Oxford, England: Polity Press.

- Mondada, Lorenza (2014) The local constitution of multimodal resources for social interaction. *Journal of Pragmatics* 65: 137-156.
- Pekarek Doehler, Simona, Johannes Wagner & Esther Gonzalez-Martines (eds.) (2018) *Longitudinal Studies on the Organization of Social Interaction*. London: Palgrave Macmillan.
- Schegloff, Emanuel A. 1996. Turn organization: one intersection of grammar and interaction. In ElinorOchs, Emanuel A. Schegloff, and Sandra A. Thompson (eds.), *Interaction and grammar* 6:10, 52-133. Cambridge: Cambridge University Press.
- Slobin, Dan I. (1997). The origins of grammaticizable notions: Beyond the individual mind. In Slobin, Dan I. (ed.), *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition*, vol.5: Expanding the Contexts. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 265-323.
- Talmy, Leonard. 2001. *Towards a Cognitive Semantics*. MIT Press.
- 高梨克也 (2016) 『基礎からわかる会話コミュニケーションの分析法』ナカニシヤ出版
- 高梨克也 (編) (2018) 『多職種チームで展示をつくる：日本科学未来館『アナグラのうた』ができるまで』ひつじ書房.
- 滝浦真人(2015)「ゴフマンと言語研究—ポライトネスをめぐる」. 中河伸俊・渡辺克典 (編) 『触発するゴフマン』新曜社. pp.217-228.
- 山口征孝 (2018) 「聞き手の参与枠組み再考：聞き手役割のモデル化の有用性」. 村田和代編(2018) 『聞き手行動のコミュニケーション学』ひつじ書房. pp.33-57. <sup>45</sup>